

フーホ八オト(呼和浩特)について——学校地図帳ではどう表記されて来たか
明木茂夫

最近「中国地名カタカナ表記」について調べている。試しに小中の学校地図帳や地理教科書を開いてみてもらいたい。シェンチェン(深圳)、スーチョワン(四川)、ワンリー長城(万里長城)、オーメイ山(峨眉山)、トンチン湖(洞庭湖)など、中国の地名は中国語の発音に擬した、いわゆるカタカナ現地音表記になっている。地理だけではない。世界史の教科書にも「黄河文明」とルビを振っているものがある。いや、地名だけではなく。音楽の教科書でも、世界の音楽という項目に、中国の「ピーパー」と書いてあったりする。念のために申し上げるが、ピーパーとは琵琶のことである。そしてこの教科書には琵琶という

漢字は添えられていない。さらに、中国のピーパーが日本に伝わって琵琶になったという意味のことで書かれている。

こんなカタカナ表記をいつ誰が何のために始めたのだろうか。私の調べた範囲で大雑把に整理するならば、

○昭和二〇年代の国語審議会で中国地名をかな書きすることが決定され、それに従って文部省が地名表記の手引きを発行した。

○かな書きの中国地名に漢字を書き添えてもよいのは当分の間だけ、と定められていた。

○中国地名のかな書きは漢字制限のために行うのだと明言されていた。

○その国語審議会には、戦前から続く漢字廃止論者(カナモジカイやローマ字会など)の人脈が参加していた。

ということになる。つまり今の教科書や地図帳は、基本的に当時のそうした方針を守っているのだと言える。国際化、現地の人への配慮という要素は、近年になって後付けで言われるようになったと考えてよい。考えて見れば、大運河を「ター運河」と書くような表記が、外国人に通じるようにと作られたはずもない。

ただ、当初は国語審議会と文部省の強力な指導の下に始まった中国地名のカタカナ化だが、歴代各社の地図帳を細かく調べてみると、意外に不統一だったり、ある

いは時期によってころ変わる
たりしていることが分かる。例
ば「黄河」は、

ホワン川↓ホワン河↓黄河^{ホウヘ}
黄^{ホウ}河^ヘ

といった調子である。「長江」
至つては、

ヤンツウ川↓ヤンツウ江↓揚子^{ホウ}
江↓長江↓長江↓長江^{チヤン}

と変化している。よくご覧いた
きたい「チャンチャン」↓「チャン
チャン」という実に細かい改訂ま
でなされているのである。こうし
たことについては拙著『中国地名
カタカナ表記の研究——教科書・
地図帳・そして国語審議会』（東
方書店）をご参照いただきたい。

「フフホト」か「フーホハオト」か

さてそうした中でふと気になっ
たのが、内蒙古自治区の「フフホ
ト」である。世間では「フホト」
「ホフホト」という表記も行われ
ている。それが、学校地図帳では

従来しばしば「フーホハオト」と
表記されてきたのである。

まず、歴代の地図帳における表
記を簡単に整理しておこう。戦前
の地名辞典の類では「帰綏」が用
いられていたようである（例えば
外務省情報部編『支那地名集成』
一九三六年）。学校地図帳におい
ても、戦前は「帰綏」もしくは「帰
化城」となっていた。それが昭和
三〇年代までは一部の地図帳に継
続して使われる。ただし戦後は、

帰綏（クイソイ）
と、現地音式のカタカナを添える
ようになる。ちなみに、当時の基
準として用いられた文部省作成
『地名の呼び方と書き方』《社会科
手びき書》（大阪教育図書、一九
五九年）では、

帰綏（クイソイ）
となっていて、微妙に違っている。
その一方で終戦直後から「フホ
ト」が用いられるようになる。
「フフホト」や「ホフホト」もし

しばしば用いられた。

そして、昭和三〇年代になって
「フーホハオト」が出現する。一
部で「フーホハオトウ」とするも
のもあった。ただし、現行の地図
帳では「フホト」が多く、「フー
ホハオト」はほとんど見られな
くなった。

以上を要するに、

「帰綏」↙「フホト」(フフホト)
「フーホハオト」

という変遷を経て、現在の地図で
は「フホト」を使うようになって
きた、と言うことができよう。

では、もしも地図帳の表記を
一つに絞るならどれがよいのだら
うか。私にはモンゴル語は分から
ないので、「フフホト」「フホホ
ト」「ホフホト」のいずれを用い
るべきかの判断はできない。しか
し「フーホハオト」はどうだろ
う。これはもしかして、モンゴル
語の地名に宛て字した「呼和浩
特」という漢字表記の中国語発音

(Hahchate) をさらにカタカナにした、ということではなからうか。「浩」という字を「hao」と読むからこそ、カタカナが「ハオ」になっていると思われるのである。

もともと、国語審議会と文部省が定め、今も教科書研究センターの『新地名表記の手引き』で用いられているカタカナ表記を厳密に当てはめるならば、

呼和浩特⇨フーホーハオトー
 となるはずだ。さすがにこれでは長すぎるといので、「フーホハオト(フーホハオトウ)」とアレンジしたのではなからうか。それにしても、元来モンゴル語の地名を漢語で「呼和浩特」と表記するのでその読み方を「フーホハオト」とする、というのは、例えば「England」は日本語で「イギリス」と言うからそのローマ字表記は「Irisau」だ、というのと同じ思えて仕方がない。結局、「フー

ホハオト」が世間に無視されたため、近年は地図帳の方が根負けして「フホホト」の表記を採用するようになった、といった事情がありそうな気がする。

中国地名の拼写法

さて、こうしたことを考えていたところに、たまたま古書店で入手したのがこの本である。

廠地編『漢語拼音中国地名手冊(漢英对照)』測絵出版社、一九七七年

県レベルにまで至る中国地名約三四〇〇項目について、それぞれ「漢字」「漢語拼音」「英文」を延々と羅列した一覧である。測絵出版社は国家測絵総局の出版部門であるらしい。さっそく「呼和浩特」を探してみると、次のように表示されている。

呼和浩特市
 Hohhot Shi
 Huhhot City

(右から漢字、漢語拼音、英文の順。以下同)

ご注目いただきたい。これによると、「呼和浩特」の漢語拼音表記は、漢字の読み「Hahchate」ではなく、モンゴル語由来の「Hohhot」なのである。お恥ずかしいことに、拼音と言えば専ら漢字の中国語音を表記するためのローマ字だと思っていたのだが、これを見るに、漢字音の表記に限らず、ローマ字で表記することになべて拼音と言うようだ。考えてみれば、「拼」とは「組み合わせる・寄せ集める」の意である。母音や子音を表すローマ字を組み合わせるのが拼音である。

これによれば中国地図におけるこの都市は、まず漢字で「呼和浩特」と書かれ、そこに「Hohhot」という拼音表記を添える、ということになるわけだ。その他の非漢語系地名についても同様で、

和田

北 地 南 天

Hotan

Khotan

二連浩特市

Erenhot Shi

Erliehenot City

呼倫貝爾草原

Hulun Buir Caoyuan

Hulunbuir Grasslands

額爾古納河

Ergun He

Erkuna River

可爾沁右翼前旗

Horqin Youyi Qianqi

Khorcin Right Wing Front Banner

果洛藏族自治州

Golog Zangzu Zizhizhou

Kolo Tibetan Autonomous Prefecture

などである。ご覧の通り、漢語拼音においては市や草原・河・自治州・旗・族などは漢字音を示されているが、固有名詞部分はそれぞれの言語（モンゴル語・満州語・チベット語等）のローマ字表記で記されている。ここで言う英文と

は、基本的に郵政式拼音の綴りだと言つてよい。もちろん郵政式と言つても綴り方は一通りではなく、ここに示したのはその一例である。と本書も序文で断っている。

国家測繪総局（現国家測繪地理信息局）は、日本で言えば国土地理院に当たる機関である。ここが、地図における非漢語系地名の拼音表記には各民族原語のローマ字転写を用いる、と定めているのである。そして、こうした地名の拼音表記の根拠となる文献には「中国地名漢語拼音字母拼写法」（一九七四年）・「少数民族語地名漢語拼音字母音訳転写法」（一九七六年）がある。これに関しては『中国人名地名漢語拼音拼写法』（文字改革出版社、一九七五年）、曾世英著『中国地名拼写法研究』（測繪出版社、一九八一年）に、各言語からの転写法に関する詳細な解説があるので参照されたい。また人名については「中国人名漢

語拼音字母拼写法」（一九七四年）及び「中国人名漢語拼音字母拼写規則」（二〇一一年）がある。

さて、こうした規程がある以上、日本の地図帳が漢字の「呼浩浩特」を中国語読みした「フーホオト」を用いていることは、やはりやや滑稽に思えてくる。まあ「呼浩浩特」に関しては、現行の学校地図帳は「フーホオト」をほとんど使っていないのだからそれでよさそうなものだが、しかし事はそう簡単ではない。例えばこんなことがあるのだ。

大興安嶺

Da Hinggan Ling

Greater Khingan Mountains

小興安嶺

Xiao Hinggan Ling

Lesser Khingan Mountains

これも同じ原則によつており、中国の地図において漢字表記は「興安」、その拼音表記は漢字音ではなく満州語由来の「Hinggan」を

用いる、ということなのである。さてそうすると、これを日本語で読む場合が気になる。従来は「だいこうあんれい／しょうこうあんれい」と音読みすることが多かったのではないか。一方カタカナ現地音式の地図帳はと言うと「大シンアンリン／小シンアンリン」となっている。カタカナ現地音はまあ措いておいて、では中国の方式に倣って、これからは満州語の読みで「大ヒンガン／小ヒンガン」と呼ばなければならないのかと言うと、それはそれで馴染まない話だ。

このように、地名の表記と呼び方というのは、なかなか難しいものである。もちろん従来 of 表記法に不合理な点があれば修正して行かねばなるまい。その一方、すでに世間で広く用いられている表記を今更改めるのも大変である。ただ、一つ言えることは、中国地名のカタカナ現地音表記に振り回されるのは御免被りたいということ

だ。中国地名から漢字を排除してカタカナ化せんがための様々なこだわり……。ただでさえいろいろな要素のからむ地名というものに、これ以上国語審議会由来の妙なこだわりを持ち込まないで欲しいと願っている。